

# 私から見た 土地改良

## 農業ジャーナリスト

## 小谷あゆみさん

## に聞く

農業ジャーナリスト、フリーアナウンサーとして食や農、地域活性化、介護などの現場取材や、テレビ、新聞等のメディアでご活躍され、農水省の食料・農業・農村政策審議会農業農村振興整備部会の委員も務められている小谷あゆみさんに農業、農村への思いについてお話を伺った。

聞き手 角田 豊 (株)竹中土木顧問

### 高知の中山間地域が原点

**角田** 小谷さんは兵庫県のご出身で、高知県でお育ちになり、関西大学文学部を卒業後、石川テレビ放送に入社された、とお聞きしています。まずは生い立ちについてのエピソードからお願いします。

**小谷** 小学校二年までは兵庫県尼崎市で育ちました。その後、父の実家がある高知県西部の旧佐賀町（現在の黒潮町）に引っ越し、小三から高校三年まで過ごしました。山と川にはさまれたいわゆる中山間地で、春にはタケノコやワラビを山へ採りに行き、夏は川に飛び込んで遊んだり、山の暮らしそのものでした。尼崎時代は、全校児童二〇〇〇人というマンモス校だったのですが、黒潮町では全校児童七二人です。私の同級生は一六人でまだ多い方で、一つ上の姉は同級生八人でした。今思うと、いきなり大都市から過疎の町へ、タイムスリップしたようなものですよ。よく考えると、高知は「限界集落」発祥の地ですから、人口減少の課題先進地域の暮らしを、身をもって体験したわけです。

**角田** 都会の二〇〇〇人規模の学校から七二人ではずいぶん落差がありますね。どんな学校生活でしたか。

**小谷** 小学校へは二〇、三〇分歩いて通ってました。途中に養豚場があるんですよ。そこだけ、姉やいとこ達と、せーので息をしな

いで走って通過してました。今思うと失礼な話ですね。祖父母は兼業で田んぼと畑をやっていました。用水路で遊んだことや、そばにニラのハウスがあり、中へ入ると温かく、モワーンとニラの香りがしたのを覚えています。中学からはバス通学です。佐賀港というカツオの一本釣りで知られる港町で、今では道の駅でカツオのワラ焼きを見せたりして有名になっています。けどこのワラ焼きに欠かせないのが、田んぼの稲ワラなんです。角田 そういったところに、小谷さんの農業に関わる原点があるわけですね。高校も地元だったんですか。

**小谷** はい、県立中村高校という、昔の阪急ブレイブスの投手山沖之彦が出た高校です。この間、二一世紀枠で甲子園に出場しました。中村市（現在四万十市）までは一時間に一本しかない汽車通学で、田舎暮らしは十分、満足しました。

**角田** 大学は関西で、卒業後、石川テレビ放送に入社されましたが、なぜ石川に。

**小谷** 国文学科でしたので、マスコミや出版には行きたかったのですが、大学二年の時、テレビ局でアルバイトをしたのがきっかけで、アナウンサーにあこがれてしまい、それからアナウンス教室に通いました。何しろ標準語も話せませんでしたからね（笑）。東京や大阪のキー局には簡単には受かりませんが、募集のある地方局を全国受けました。北海道



から九州、四国まであちこち受けて、なぜか合格通知をくれたのが石川テレビだったというわけです。縁もゆかりもないけど、金沢が呼んでくれたと（笑）。

## 石川テレビへ入局、自ら制作した「道草のススメ」で農村を再発見

**角田** 石川テレビには一九九三年から一〇年間勤務されましたが、その間、農業との関わりが深まったそうですね。

**小谷** はい、アナウンサーになってから気づいたんですが、人が書いた原稿を読む仕事は、あんまり性に合わないなど（笑）。もともと自分で現場に行つて、この目で見聞きして、感じたことを伝えたいと思いました。思えば、高知時代、台風がすごいところでしたから、大型の台風がくるたびにテレビで台風中継を見ていました。子供は台風が好きですからね。あの雨風にさらされながら中継するリポーターに憧れていました。

**角田** 台風中継のリポーターになりたかったんですか。夢はかないましたか？

**小谷** それで、石川県は雪国だったんですね（笑）。大雪の兼六園から一度中継をしたことはありました。マイカー通勤でしたので、冬は車にスコップや雪かき棒を常備して、雪国での暮らしも楽しかったですね。石川県には一〇年おりました、夕方のニュースキャスターをしていました。そのうち、自分のコー



能登の旧中島町で棚オーナーになり米づくりを体験取材「道草田んぼ」

ナーを持つようになり、最初にやったのは、身近な食や季節の情報です。地域の伝統文化に興味があり、ネタに困るたびに、知り合いの山菜料理店のご主人に頼んで、春は山菜採り、イワナ釣り、秋はキノコ狩り、石川県ではキノコのことを「コケ」と言うんですよ。それから自然薯やムカゴなど、里山のスローフードの取材はかなりやりました。自分のコーナーにスローライフのイメージから「道草のススメ」というタイトルを付けました。

**角田** 石川県じゅうの里山を歩かれたんですね。

**小谷** はい。地域らしさをどんどん求めているうちに、気づいたら、農村にいました。峠を超えて田舎へ行けば行くほど、おもしろい





石川テレビ時代、トチの実を干す風景を撮影する。旧白峰村にて

郷土の文化が息づいていると感じました。白山麓の県境の集落には樹齢一三〇〇年の大トチノキがあり、その栃の実を干して何度もアク抜きをする様子や、大雪を宝に変えて人を呼ぶ「雪だるまウィーク」など、豪雪地帯の冬は雪に閉ざされませんが、だからこそ食文化が発達し、祭りやイベントも外部依存ではなく、手作りして生み出していく知恵に感動を覚えました。

## 地域の宝は中山間地にある

**角田** まさに地域振興、地域活性化ですね。

**小谷** そうです。地域の個性は端っこにあると感じていました。ただ、毎週、新しいネタを探すのも大変になってきたんですね。どうにか連続も

のを作れないかと思いついたのが、金沢市民農園です。野菜作りを定点観測して追いかければ、土づくり、畝の立て方、苗の選び方など、肥料、いろんな工程があるわけです。菜園名人を知り合いに紹介してもらい、野菜の花の美しさ、収穫の喜びを実感しました。野菜づくりを一年間やったら、次は、米づくりだろうと。田中島町（七尾市）に、名水百選の藤瀬の水がある鉈打棚田というところで、棚田オーナーを募集している小さな新聞記事を見つけ、棚田オーナーになりました。たしか一区画一万五千円で三〇kgのハサ干しコシヒカリが保証されていました。代掻きから畦塗りに始まって、田んぼに三脚を立てて、カメラに向かって「今日からこの棚田オーナーになります」と一人でレポートするんです。地元のお母さんたちに習って、苗かごを腰につけて手植えする中で、ゲングロウ、オタマジヤクシ、チョウウ、サギ、いろんな生き物に出会いました。

**角田** 生物多様性ですね。視聴者もどういうふう

に稲が成長するのか、楽しみになるでしょうね。

**小谷** そうですね。春夏秋と何度も通ううちに、水を張ってキラキラ光る初夏の棚田。青々と風にそよぐ稲のじゅうたん。そして、黄金色に染まる収穫の秋。田んぼって、こんなに美しいものだったのか。その日の作業や撮影を終えて、夕映えの里山を眺めているうちに、じゅんと泣きたいような気持ちになりました。お米を作るための田んぼなのだけれど、その価値は、食料生産だけでなく、むしろ過程にこそ、喜びと感動の物語があると。

きれいに草が刈られたあぜや斜面、一枚一枚の田んぼは、人工物なのに作為的ではなく、自然に調和し、生命力に溢れているんですね。棚田との出会いが、農業ジャーナリストの始まりです。農村すごい。日本人すごいと。

## 世界農業遺産「能登の里山里海」

**角田** 棚田オーナーになってレポートをされたのはいつ頃ですか。

**小谷** 二〇〇一年頃だったと思います。

**角田** 実は私も、二〇一〇年から二〇一一年にかけて一年四ヶ月、金沢の北陸農政局に勤務していました。能登は日本海に突き出た半島で三方が海に囲まれていますので、棚田、谷津田、ため池などがモザイク状に広がっています。漁村が点在するなど、独特な景観を形作っています。在任中に「能登の里山里海」が日本初の世界農業遺産に認定されたこともあり、今お話を聞いておりまして、私もすごく共鳴いたしました。

**小谷** 「能登の里山里海」が世界農業遺産になったのは、二〇一一年ですね。日本初ですからすごいことですよ。世界農業遺産等専門家会議の委員長をされている武内和彦先生（東京大学国際高等研究所サステイナビリティ学連携研究機構（IR3S）機構長・特任教授）とは、実は、農水省の審議会でご一緒させて頂いたご縁で、師と仰いで勝手に慕っているのですが、自分が石川時代に感じていた棚田の魅力や里山の価値を、国連食糧農業機関（FAO）が評価したことに、ひそ



奥出雲のたたら製鉄かな流し跡の棚田へ現地見学会「棚田学会」メンバーの皆さんと

かな感動を覚えました。国連の目指すものと自分の感覚は似ているなど（笑）。世界農業遺産の条件は、「社会や環境に適応しながら何世代にもわたり継承されてきた独自性のある伝統的な農林水産業システム」というものです。気候風土の厳しい条件の中で、地域の人々が工夫し合って食べ物を作ってきた仕組みです。輪島の白米千枚田を見ると、海に向かって階段状に連なる棚田はすごい迫力ですが、あんな条件不利なところをなぜ日本人は耕してきたのか。この土地を守り、食を生み出す叡智ですよ。どんな技術にも劣らない偉業

ですが、築いたのは、そこに住んで来た人たちだ。何代にも渡って暮らしてきたから継承されたのだと。誰がなんとやろうと耕す人、耕し続けている人が偉いんだ。地球の食糧問題に貢献しているんだということ。角田 農村の話になると熱く語られますね。小学校の時に過ごした高知の中山間地とも重なるのでしょうか。小谷 そうですね。最近気づいたんですが、実は私の進学を待つて両親は別居したんですね。母は私と関西へ引っ越し、父だけ高知に残りました。

なので二〇年以上、黒潮町の実家へは帰りにくかったのですが、つい数年前、仕事で呼んでもらって二〇年ぶりに帰省しました。家の近所を歩いて、懐かしいものがこみ上げるのと同時に、ああ自分は今まで、日本中の農村を取材して、どの農村もすばらしく意義あるものだと思ってきました。この山と川と田んぼに囲まれたふるさとに帰りかけただけなのかもしれないと思いました。それほど、ひなびた田舎の田畑の石垣やあぜ道のある風景は、愛おしいものでした。だからわたしの農業・農村観というのは、家族でありふるさとの問題なのだろうと思うようになりました。

## フリーアナウンサーに転進、 介護番組と野菜を作るベジアナに

角田 一〇年間テレビ局で充実した仕事をされて、二〇〇三年にフリーアナウンサーに転身されましたが、それは活躍の場を全国に広げたいといったお気持ちからですか。

小谷 そうですね、もともとフィールドを全国に広げたい、日本中を、世界を旅したいと思いました。最初に住んだのは、品川区だったのですが、なんと品川にも区民農園があるじゃないかと。東京のど真ん中で野菜作りができるなんて面白いと思って始めました。一〇㎡で年間二万四千円でしたか。土いじりはリラックスできますし、草取りは無心になりますし、コンパニオンプランツと言って、トマトのそばにバジルを植えると互いがよく育つなど、畑をデザインすることですから、野菜づく





野菜を作るアナウンサー「ベジアナ」としてブログで都会での農ある暮らしを発信。区民農園で出会う皆さんと、採れた野菜や種を物々交換して楽しむ。2005年頃

りはクリエイティブです。種をまいて水をあげて、小さな芽が出てやがて実る。作った野菜はもちろんおいしいんですが、それは食味とは別の感動なんですよね。自分が作ってきたという物語です。そんな感動を、ブログで発信するようになりました。そのうち読者が、野菜（ベジタブル）を作るアナウンサーだから「ベジアナ」と名づけてくれて、ブログのタイトルも「ベジアナあゆの野菜畑チャンネル」にして、かつてテレビでやってきたことをSNSで発信するようになったのです。

**角田** 今は、区民農園ではなく、ベランダ菜園だそうですね。

**小谷** そうなんです。ベランダでゴーヤ、ミニトマト、パクチー、江戸東京野菜の内藤とうがらしなどを育てています。区民農園を始めた頃は、ま

わりは会社をリタイアした世代が多かったのですが、だんだん食育に関心のあるファミリー世代が増えてきて、今は倍率が高くて当選しないんですよ。世の中ふしぎですよ。日本中であれほど耕作放棄地が増えて困っているのに、都市では家庭菜園をしたくても農地がなくてできない。最近は、企業の体験農園が増えていますが、私は自分の体験から、もっと気軽にお年寄りや子育て世代でも独身でも、多様な人が農園ライフを楽しめるよう、行政にもがんばってもらいたい。農業と福祉、農業と教育の連携です。そういう意味で「都市農業振興基本法」は追い風になってくれると期待しています。

**角田** フリーアナウンサーとして、食や農業以外に、福祉・介護の分野でもご活躍されていますね。

**小谷** はい。フリーになって最初に決まったレギュラー番組が、NHKの介護の番組で、二〇〇四年から毒蝮三太夫さんと十四年間、司会をしています。オーディションでしたが、何しろ農村の取材でお年寄りとのやりとりは得意でしたので。「ハートネットTV介護百人一首」という番組で、介護する人の介護ストレスや介護うつが社会問題になっていますが、心の疲れやストレスを短歌に詠んで発散してもらおうという企画です。義母を看るお嫁さん、親や夫、妻の介護、病気のわが子の介護もありますし、介護福祉士など専門職の短歌もあります。人には言えない思いを、紙に書いて吐き出そうというものです。そんなわけで、自分の取材テーマは介護にしても農業・農村にしてもやはり家族問題なんですよね。

### 畜産の生産者との出会い

**角田** 農水省の食料・農業・農村政策審議会では、畜産部会の委員もされているんですね。畜産との出会いはどういうものですか？

**小谷** 介護番組のディレクターも、私が農業好きなのを知っていましたから、あるとき「畜産番組のリポーターを募集してるよ」と声をかけてくれました。本当は野菜の番組をやりたいかったですよね、「ベジアナ」ですからね（笑）。でもせっかくのご縁ですし、フリーは来た仕事を断つてはいけないみたいだしと。グリーンチャンネルというCSの競馬チャンネルで、競馬中継がないときは畜産番組を放送していたんですね。中央畜産会提



畜産番組のリポーターとして全国の牧場、生産者を取材。栃木県那須の今牧場にて

供の「畜産特産ごちこう産」という番組で、牛、豚、鶏、それから羊まで、北海道から九州、沖縄まで全国の牧場を訪ねました。畜産ってやはり防疫のこともあり、一般にはあまり現場の情報が出てこないですよ。そんな中、毎月、牧場の生産者を訪ねていると、子牛が風邪を引かないようにベストを着せたり、子豚には暖かくストーブをつけたり、命を大切に、懸命に育てているのを知ってしまったのです。食品残渣を飼料にしたり、飼料米で田んぼを守る養豚農家と米農家の耕畜連携も知りました。これからは家畜がコメを食べる時代なのかと。そうした生産現場の苦労や、農業と食との関係を知った以上、これを伝えるのは自分の

使命だと思うようになりました。畜産番組がきっかけで農水省の方が審議会の畜産部会に推薦してくれたんですよ。

**角田** 同じ頃、グルメリポーターもされていたんですね。

**小谷** はい。フジテレビの「スーパーニュース」で五百円ランチとか柔らかいお肉とか、行列のできるお店とか、いわゆるグルメ特集です。華やかで視聴率もよい人気コーナーだったんですが、同時に感じてきたのは、レストランや料理人は有名になってリスベクトされるのに、料理の材料になる農畜産物をつくる生産者にも、もっと光が当たってもいいのではと。ところが、二〇一二年、震災を機にグルメリポーターの仕事がぱたりとなくなりました。

## 大震災で気づいた農村の豊かさ

### 農業は高齢者の居場所

**角田** 報道自粛があったのです。

**小谷** はい、大きな仕事でしたのでショックでしたが、その後の自分の方向性を考えると、よい転機になりました。その震災のすぐ後の四月でしたが、介護番組のロケで、埼玉県小鹿野町の一〇〇歳の男性、義七さんを訪ねました。まだ計画停電の最中でした。長男さんは久喜市にお住まいで、毎週、様子を見に実家に帰っておられたんですね。同居を呼びかけても、義七さんは一〇〇年住んだ自分の家を離れたくないと。奥さんに先立たれてからは一人暮らしで、ヘルパーさんも来てくれま

すが、ご本人は家の裏の畑へ出ると、クワを振り上げて土を耕すぐらい元気なんです。介護される側ではなくて、自立した生産者なのだと思います。計画停電の日だったんですが、義七さんの家には囲炉裏があつて、やかんのお湯や味噌汁は薪をくべて沸かします。日の出とともに起きて夕方五時か六時には寝てしまいますので、停電になっても何の不便もないどころか、そもそも気づかないんです。これはすごいと思いました。東京では帰宅困難者のパニックや、流通がストップしたりと、いろんな面で都市の脆弱さが浮き彫りになりましたが、農山村ではそういった心配事は無縁で、お天道様とともに生きる暮らしが穏やかに続いていったんです。食料は自分で作る、水は山の湧き水がある。豊かさって何だろうと。義七さんはそれがわかつているからこの土地にこだわった。自分のステージは畑であり、山であり、この家を守ることだと知っておられたんです。長男の久也さんが詠んだ介護短歌はこういうものです。

「暑い夏大根の種発芽して百歳の父杖で草取り」

**角田** 畑でのお父さんの姿が目に見えようですね。

**小谷** 本当ですね。父の生き様と、それを尊重している息子のまなざしが表れていますよね。自ら畑を耕す人は、誰かに依存する人ではなく、生産者なのだ。野菜やイモを息子や他の人に「与える」人であると。実際、ロケの帰りに私たち番組スタッフ全員が、義七さんからキクイモと湧き水



の入ったペットボトルをいただきました。本当の豊かさ、強さはこれだと思いましたね。ですから私は、定年後の帰農は大事だと思っています。七〇歳からあと三〇年間、現役で田畑を耕せば、介護いらずで済みます。都会で居場所もなく仕事もなく何も生産せずに生きるよりもよほど充実した人生を過ごせます。「農」という営みは、農産物の出荷、販売だけじゃないんです。自分で自分の食べ物を作る。運動にもなって脳も活性化しますし、生涯現役です。お仕着せの介護予防運動やリハビリ体操よりもよほど建設的です。たくさんとれた米や野菜は、子や孫や知り合いに分けてあげれば喜ばれます。農業と福祉の連携で「農福連携」を国も推し進めています。もともと農には福祉的な側面が含まれているんです。

## 日本の地域の宝は「耕す人」

### 農村の知恵に世界は魅了される

**角田** いろんなエピソードがありますね。農業ジャーナリストとして全国一〇〇〇市町村を廻られたそうで、今、地域振興で地域の宝を見つけようと言われていますが、講演や取材で全国を廻られて、これが地域の宝と思われるような話はありませんか。

**小谷** そりゃあもう、この人は人間国宝にしてほしいと思う人に静岡県旧龍山町（浜松市天竜区）で出会いました。静岡県には、「ふじのくに美しく品格のある邑づくり」という農村評価システムがあり、その取材だったのですが、「瀬尻の段々

茶園」という急傾斜の段々畑で、〇・四haの敷地に四〇枚、断崖絶壁のような石垣です。耕して天に至ると言いますが、それを見ると日本人は農耕民族というけれども、山岳民族なんだと思いましたね。まさに天空の茶園で、この石積みを作った張本人、藤原久一さん（八九歳）に出会いました。お話を伺うと、昭和十三年から六年間かけて、藤原さんが九歳から一四歳のときに、ご家族だけで石を積み上げたそうです。完成から七五年たった今も一度も崩れたことのない石垣です。なぜそこまでして耕すのか。そこは山あいでも田んぼはできない土地なんですね。日本人の生きる知恵なのだと。代々その土地を耕してきた人が一番美しい宝なのだと思います。

**角田** 現在、インバウンドの外国人訪日客も政府目標を超えるぐらいに増えてきています。東京や京都といった観光地だけではなく、農村地域にも外国人がどんどん増えていますね。

**小谷** 農家の暮らしや農村の営みそのものが日本らしさなんですよね。私は「棚田学会」に入会して全国の棚田を見ていますが、棚田や段々畑など里山の魅力はまさに伝統的な日本文化です。そこには観光や癒し、学びなど多面的な価値があります。平地の大規模農業とは別の、地形を活かして耕してきた文化的価値が、中山間地や傾斜地の魅力なんです。先日、徳島の「にし阿波の傾斜地農耕システム」という世界農業遺産認定地域のイベントが東京でありまして、話を聞いて驚いたのは、ナショナルジオグラフィックという世界



「瀬尻の段々茶園」は静岡県棚田等十選に認定。静岡県「むらのおと」の取材にて藤原久一さんと





昭和62年から20年かけて整備した富士宮市白糸の里「平成の棚田」。リーダーを務めた渡辺勝さんは、赤いキャップがおしゃれな95歳！「いいな故郷は、守ろう原睦み会」の皆さんと

## 高齢者を励ます農業農村整備が 次の世代の担い手を呼ぶ

的雑誌でツアーが生まれ、外国人ツアー客が既に八回も訪問しているそうです。ナショナルジオ読者のように世界中の大自然や地球環境に関心のある外国客が見ても、「にし阿波」の急傾斜地の農業、日本人の技術と知恵はすごいということです。私もその中の落合の集落を見に行きましたが、まるで東洋のマチュピチュだと思いました。「にし阿波」は、インスタグラムやSNSの投稿で、世界農業遺産になる前から外国人に知られていたそうです。

**角田** 次に農業農村整備についてお伺いします。農地や水など農業生産の基盤を整備する、地味な仕事ですが、そこがしっかりしていないと実際の農業生産はうまくいかないわけです。小谷さんは、

食料・農業・農村政策審議会の農業農村振興整備部会の委員も務められておられます。最近、島根県の現地を視察されたと聞いておりますが、現場の印象はどうでしたか。

**小谷** 島根では大規模から中山間地まで様々な農業を見せてもらいました。農業農村整備・土地改良というと、区画を大規模にするハード整備のイメージがありますが、結局、耕す人がいることが大事なわけです。集落営農で大区画化してシステム化された農業もすごいと思いましたが、例えば、安来市では、大規模農業と並行して、どじょう米を作っていました。どじょうを放流し、無農薬・

無化学肥料でブランド化を図っています。田んぼも物語が大事な時代ですので、兵庫県たじまのコウノトリや新潟佐渡のトキのように、生き物との共生は伝わりやすいですよ。ソフト面ではブランド開発、ハード面ではそれに見合った整備です。中山間地域の水田では、法面の斜度四五度まで対応できる草刈りロボットを見せてもらいました。デンマーク製で四〇〇万円するそうです。本当は国産が欲しいけど、国産の草刈りロボットは良いものがないそうです。米作りはとにかく草刈りですよ。現地の人との懇談会で、「杖を突いて田の見回りはできるけれど、杖を突いて草取りはで



農業農村振興整備部会の現地調査で島根県出雲市佐田町へ。広域連携組織「未来サポートさだ」の自動草刈りロボット



きない」という言葉にドキッとしました。高齢でがんばっている人たちがもうあと五年、一〇年継続できる、励みになる政策が必要です。家族農業や小農の価値を見直さないで、日本農業はどこへ行くのか。後継者不足は自然現象のように言われますが、継いでいる農家と継がない農家の違いは何なのか。大変な中でも両親や祖父母が誇りや喜びを見出しながらやっている家の息子や娘たちは継いでいるケースが多いのです。一生懸命やっている親の背中が、子供たちに伝わります。新規就農も大事ですが、人生一〇〇年時代、まだまだ働けますよ。働けるのに気持ちが悪えてやめてしまるのが一番悲しい。やめずに続けていけば、息子や娘たち、あるいは他の誰かが後継する可能性もあります。今は「孫ターン」と言って、孫世代の田園回帰が増えています。農業をやめてしまえば、どの可能性もなくなり、彼らの帰る場所がなくなります。中山間地の棚田はとりわけ逼迫していますが、いま「棚田法案」の動きがあり、これには期待しています。棚田の価値は生産性ではありませんから、棚田オーナー制度やツーリズムなど、外からの多様な主体の参画で、農村に誇りを取り戻し、これ以上農地を減らさない、新時代の棚田評価を期待しています。

## 売るのは農産物、ではない

### 日本人の農村の物語を見せる時代

**角田** 農地が耕作放棄され誰も引き受け手がいないのは、整備がされていない水田や畑です。土地

改良事業で整備した農地には引き受け手がいて、しっかりと農業生産がなされています。

**小谷** 現場で聞いてなるほどと思ったのは、法面を緩やかにしてくれと、耕作地が狭くなってもいいから機械を入りやすくしてほしいという話がありました。農地を耕しやすく、あるいは地域の特性を活かした土地改良を行っていくべきです。島根で感動したのは、二〇〇の集落を束ねた土地改良区の理事長さんは二〇〇の集落を全てくまなく回ったそうです。

**角田** 事業化する時には地域をまとめなければい



島根県雲南市大東町にある日本の棚田百選「山王寺棚田」を守り継ぐ皆さんと

けませんからね。

**小谷** はい、大きな会合には女性は出てきませんが、地域の公民館なら近所なので出やすいと。まずは各地区の課題など現場の声を聞いて、それを合意形成に反映させる、大変な仕事だと思いました。大規模生産・販売は大事ですが、誰も見に来ない、誰にも評価されない仕事はやりがいを持てにくい。もっと人間の心と心を結びつけるような、都市と農村交流でも、包括的な視点が欲しいです。土地の個性に見合った区画整理をしていくこと、そして、これからの時代は喜びややりがい



香川県瀬戸内海に浮かぶ豊島の耕作放棄地ではオリーブ牛の繁殖牛を放牧



が見える農業です。日本の農業は「見える時代」だと思えます。ブランド米もそうですし、棚田のようにその土地自体をブランドにしていく、農泊やツーリズムも視野に、農村そのものを商品としてとらえる。規模や合理性とは異なる切り口の土地改良です。現場の声を聞くのと同時に、地元の人には地域の宝に気付いていない場合もありますので、課題とともに外の人の視点も入れて意見交換する時期に来ていると思います。

**角田** 地域の人は、案外自分たちの地域の宝に気付いていないので、小谷さんのような発信力のある方が現地に赴き、こういうところが素晴らしい

とかいろいろ指摘されると、地域の人たちは自分たちにはこういうものがあるのだ、と気付くきっかけになるかもしれませんね。やはり、誇りと自信を持って農業に取り組んでいくことが持続可能な農業の基本だと思います。地域のみならず農業や農村の将来展望を話し合い、合意形成をして、その実現に必要な土地改良を進めていければいいと思います。最後に何かお話はありますか。

**小谷** 米あつてこそその日本の農業だと思えますが、私は畜産も見てきましたので、耕畜連携の視点も欠かせないと思います。飼料米もそうですし、耕作放棄地での繁殖牛の放牧や、兵庫県淡路島は酪農が盛んで神戸牛の繁殖農家も多く、牛糞堆肥が豊富だからこそ土づくりができ、米、レタス、タマネギなどの三毛作が可能になっているんですね。それからため池が多いのですが、ため池から流れる水が、海苔業に影響するので、漁業者と農業者が共同でため池の掃除をする里海連携もあります。そうした別の主体との連携ですね、農福連携、農業と観光の連携もそうですが、本来循環型で、資源を活かして回してきたのが日本の農林水産業なのです。自分の田んぼだけ米を作って儲ければいいのではなく、お隣の畜産農家も、山も海も川も湖も、一緒に手を取りながら、互いの問題を解決したり、喜びを共有する関係がサステイナブルであり、今、国連で勧めているSDGs（持続可能な開発目標）の考え方もつながります。そうして地域全体が盛り上がり、いくような農業・農村は強くて魅力があると思います。

**角田** 本日はお忙しいところ、ありがとうございました。貴重なお話をお伺いでき、嬉しく思います。今後とも、農業ジャーナリストの立場で農業農村の振興にご貢献いただきますことを期待しております。



こたに  
**小谷 あゆみ**

(フリーアナウンサー・農業ジャーナリスト)

兵庫県出身・高知県育ち。関西大学文学部卒業。石川テレビ放送を経て2003年からフリー。野菜をつくる「ベジアナ」として都会の菜園から農に親しみ、農をリスペクトする社会。都市と地域が互いを喜び合う持続可能な農業をテーマに取材・講演。訪ねた市町村は全国1000ヶ所以上。NHKEテレ「ハートネットTV介護百人一首」司会。日本農業新聞コラム連載。農林水産省 食料農業農村政策審議会 農業農村振興整備部会委員ほか